

地域を愛する心を育成するカリキュラムの編成 ～地域と連携して組織的に取り組む「地域学習」～

早川 克善（学校経営コース）

1 はじめに

本研究は、生徒の地域を愛する心の育成を図るため、総合的な学習の時間を軸としたカリキュラムを編成し、組織的に取り組むことができる体制づくりを目的としている。

中学校学習指導要領の改善のポイントとして「社会に開かれた教育課程」が示され、身に付けるべき資質・能力を教育課程で明確にしながら、社会との連携及び協働により実現を図っていくことが求められている。しかし、勤務校では、地域や家庭間の結び付きが希薄であり、地域の人とかかわる機会を新たに生み出すことが困難な現状であった。また、全国学力・学習状況調査で、地域にかかわる項目の数値が、県や全国の平均と比べて低いことから、生徒の地域に対する関心が低いと言える。

そこで、地域と学校をつなぐ教育課程として「総合的な学習の時間」を位置付け、地域の良さや特徴をより生かす学習とすることが必要であると考えた。

2 中学生が地域の魅力を発信するための実践 (令和3年度)

(1) 実践方法

令和3年度は、総合的な学習の時間と音楽での教科横断的なカリキュラムを編成し、地域の魅力を曲（企業のCMソング）にして発信することで、生徒の地域を愛する心の育成を図った。

① 総合的な学習の時間と音楽での教科横断的なカリキュラムの編成

総合的な学習の時間で職場訪問を行い、まとめとして、企業や商品をピーアールするキャッチフレーズを考えた。また、地域の学習として、身近な商店街の現状と取組についての講話も行う。音楽の授業では、音声合成ソフト「synthesizerV」を活用して、総合的な学習の時間で完成したキャッチフレーズに旋律を付け、地域や地元企業をアピールするCMソングを制作した。

② 地域への愛着の調査

生徒の地域への愛着の実態把握のため、実践前後で、酒井ら(2016)の「地域への愛着」尺度の中から、中学生に適していると思われる項目を抜粋し、アンケートを実施する。アンケートの結果を、各項目の変容の見取りと、分散分析によって、本実践が地域への愛着にどのような効果があったのかについて検証を行った。

(2) 実践の結果

① 総合的な学習の時間と音楽での教科横断的なカリキュラムの編成

職場訪問は、市の主要産業である金属加工業と卸売業の企業4社で行った。受け入れ交渉は、地域連携事業を推進している、公益社団法人”つばめいと”が行った。工場見学に加え、働く人の思い、若者に期待することなども聞くことができた。職場訪問のまとめとして、「仕事内容、商品の魅力」「印象に残ったこと」「みんなに伝えたいこと」をキーワードにし、それらを組み合わせでキャッチフレーズ（歌詞）にした。ミライシードのオクリンクを活用して、考えを共有したことにより、全員が時間内にキャッチフレーズを考えることができた。

1学期に他学年で行った曲づくりの試行実践の結果から、限られた時間で旋律を創作する場合、音階についての指導は必要であることが明らかとなった。そこで、曲づくりの前に、創作で使用するソフトを用いて、音階の指導を行った。さらに、TVで流れているCMソングの楽曲分析を行い、聴き手に与える効果や、印象に残りやすいCMソングの特徴などについて考えをまとめた。

CMソングづくりは、長音階か5音音階のいずれかの音階を用いて、終止感のある曲にすることを課題や条件として行った。生徒は言葉の抑揚を意識しながら旋律を考えていったが、抑揚に合わない無理な跳躍を多用する生徒が多くいたため、順次進行によって自然な流れの旋律ができることを補足した。音階の指導と楽曲分析により、全員が自分の決めた音階の音を正しく選択し、リズムなどを工夫しながら曲を仕上げることができた。

完成したCMソング（図1）はmp3に変換し、総合的な学習の時間で作成したスライドに添付した。その資料をもとに総合的な学習の時間に、活動のまとめとして、互いに発表し合った。出来栄の良い作品が流れたときは、歓声上がるなど、互いの作品を称え合う姿が見られた。発表会はCMソングのコンテストも兼ね、投票数の多かった作品を企業に送った。



図1 生徒が作成したCMソング（採譜したもの）

② 地域への愛着の調査

1回目のアンケートでは、各項目の合計値を有効回答数で割って平均値を算出したところ、「地域のために活動することは自分の楽しみである」と「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」の項目に対する肯定的な回答が、他の回答の数値よりも低いことが明らかとなった。実践後の2回目のアンケートでは、これらに対する肯定的な回答は、わずかであるが上昇が見られ、全体的に平均値の向上が見られた。しかし、1回目と2回目の総点を分散分析で比較した結果、有意差を認めることができなかった。

(3) 成果と課題

① 総合的な学習の時間と音楽での教科横断的なカリキュラムの編成

総合的な学習の時間での職場訪問は、見学だけでなく、商品に込めた思い、働く人の思いや、若者に期待することなどについても、話してもらう場面があった。それにより、生徒たちはCMソングのキャッチフレーズを考える際に、何を伝えたいのかが明確になった。調べ活動で終わるのではなく、実際に職場訪問することは、企業の魅力を知るための有効な手立てであったと考える。また、伝えたいことが明確になったことは、どのようなCMソングづくりをしたいのかという、動機付けにもつながったと考える。

② 地域への愛着の調査

アンケートの結果で有意差を認めることができなかったのは、鈴木ら（2008）が地域愛着は比較的長期に醸成するものであると述べているように

活動が2か月という短期的な取組みであったことが、有意差を認めることができなかった原因であると考えられる。地域を愛する心の育成には、活動をイベント的に終わらせるのではなく、長期的で組織的な取組にしていく必要があると考えた。

3 「地域学習」をテーマとした総合的な学習の時間のカリキュラムの編成（令和4年度）

(1) 実践の方法

令和3年度の課題を受け、令和4年度では総合的な学習の時間の3年間のテーマを「地域学習」とし、総合主任、総合担当と地域コーディネーター、外部の機関が連携して取組めるような体制づくりを行い、準備活動も連携して進められるように計画した。

① 総合的な学習の時間のカリキュラム編成
「地域学習」にかかわる活動を系統的に行うために、各学年で各学年の総合的な学習の時間に、「地域学習」にかかわる活動を年間指導計画に位置付け（表1）、3年間の学びを通して、地域を愛する心の育成を図るカリキュラムの編成を行った。

表1 「地域学習」に関わる学習内容

学年	内 容	実施時期
1	キャリア教育講演会（商店街調査と関連付け）	6月
	学区の商店街調査（フィールドワーク）	7月
	商店街のテーマソングの作成（音楽）	11～12月
	テーマソングの録音（ハンドパン奏者と共演）	1月
2	地域で働く人からの職業講話	5月
	地域の産業調べ（産業史料館への見学を含む）	6～7月
	職場訪問	11月
	企業の魅力を伝えるCMソングの作成（音楽）	11～12月
3	燕市の未来を考える	10～11月

② 組織的に取り組めるための体制づくり

地域学習に関わる総合的な学習の時間の活動に、各学年の総合担当と地域コーディネーターが連携して取り組める体制づくりを行った。各取組の計画作成前に、打ち合わせ会議を行い、目標と取組み内容、役割分担を明確にした。

(2) 実践の結果

① カリキュラムの編成と実践結果

1年生のテーマを「地域を知る」と設定し、学区にある宮町商店街を中心としたフィールドワークを設定した。地域で働いている大人と交流することによって、自分の将来の進路について考え、職業観を身に付けること、身近にある商店街の現状を把握し、地域への理解を深めることを、活動

のねらいとした。商店街のフィールドワークは、「つばめいと」が店舗に依頼し、多くの店舗から受け入れてもらったことにより、少人数での班編成が可能となり、コミュニケーションの機会を確保できた。また、新旧の商店街への受け入れを依頼したことにより、生徒は商店街の様々な人の思いに触れながら、活性化のために何が必要かなど、商店街の将来について考えていた。次に、総合的な学習の時間に、どのように商店街の魅力を発信していくかについて考えた。さらに、音楽の時間で、武蔵野大学コピーライティングゼミの学生が商店街のために作成したキャッチコピーにメロディを付け、商店街をPRするテーマソングを作成した。授業では、つくった曲を聴き合い、歌う活動を通して、実際に歌える曲であるのかをグループで検討する活動を行った。振り返りには「宮町の皆がもっと笑顔になるところが見たいです」など、商店街に対する願いなどの記述が多く見られた。



図2 生徒が作成したテーマソング(採譜したもの)

2年生のテーマを「働くこと」と設定し、地域で働く人からの職業講話、職場体験と職場訪問を通して、そこで働く人の思いに触れ、産業史料館への見学を通して、地域の産業への理解を深めるとともに、職業観を身に付けることを、活動のねらいとした。学年総合担当と史料館への打ち合わせに行った際、事前学習が必要であると判断し、学芸員を招いて地場産に関する講演会を行った。講演会では「燕市は好きか」の問いに対しては、約8割の生徒が手を上げたが、「将来燕市に戻ってきたいか」と問いかげに対しては、約2割の生徒しか手を上げなかった。それは「燕市の魅力を知らないから」であると講師は語り、産業の歴史や特徴について説明した。「BtoB」(企業間取引)によって世界からも注目される優れた技術力となっていることに、講演会を通して生徒たちは気付くことができた。

3年生のテーマを「創造」と設定し、自身の将来のこと、燕市の将来のことを考える「燕市の未来を考える」を、地域学習3年間のまとめとして

位置付けた。「燕市の未来を考える」は、大人(20歳)になった時、自分たちが住んでいる地域が、どのようになっていて欲しいかを考えることを目的として行った。1時間目は、燕市で活躍する大人3名を招き、燕市で働く理由や職業観などについて座談会形式で語ってもらった。2時間目から4時間目までは、各教室に分かれ、「5年後の燕市が〇〇になってほしい」ことについてファシリテーションを行った。ファシリテーションでは、商店街で働く大人、市役所職員、つばめいと職員、新潟工科大学学生等10名が、生徒たちから意見を引き出すファシリテーターを担当した。どのクラスも未来のふるさとを考えながら話し合っている姿が見られ、振り返りの記述にも、市の将来について考えたり話し合うことが楽しかったという記述が複数見られた。

② 組織的に取り組めるための体制づくり

各学年の取組が、前年度の資料をもとにした活動中心の、謂わば「点」の取組であったため、総合担当と地域コーディネーターが、各学年の取組をコーディネートしていく体制づくりを行った。また、地域の産業を学ぶために、企業の協力が必要であり、学校と企業をつなぐ”つばめいと”と

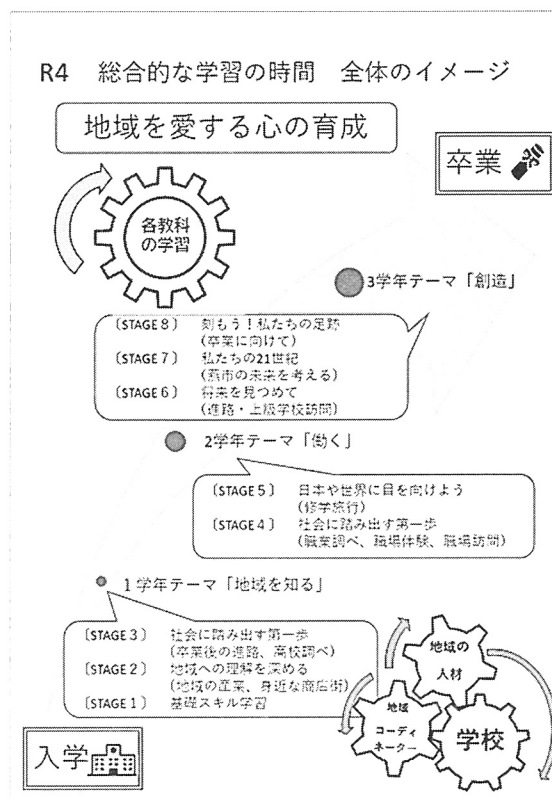


図3 R4 総合的な学習の時間の全体イメージ

の連携が必要である。継続的な協力体制にするためにも、地域コーディネーターと“つばめいと”とつながる必要があり、各学年の取組の計画作成から、地域コーディネーターと“つばめいと”で、内容の確認と準備活動を行った。また、地域連携には目標を共有し、熟議できるような体制づくりが必要であり、総合的な学習の時間の全体イメージ(図3)を用いて、目標の共有を行った。また、熟議のために、表2の流れを基本形とし、打ち合わせ会議には、総合主任、学年総合担当、地域コーディネーター、“つばめいと”が参加し、各学年の取組みを進めた。

表2 地域連携のための体制づくり

1	総合主任，学年総合担当， 地域コーディネーターで大綱を作成	
2	打ち合わせ会議（外部機関と関わって）	
3	学年部会で提案（意見集約）	3，4を
4	打ち合わせ会議（外部）	繰り返す

(3) 考察

- ① 「地域学習」を3年間のテーマとした、総合的な学習の時間のカリキュラムの編成

a 生徒の変容から

「地域学習」をテーマとした総合的な学習の時間のカリキュラムにより、生徒たちは地域への愛着が高まったと考える。その理由は以下の通りである。

1年生は、商店街へのフィールドワークにおいて、商店街の人の思いに触れる中で、商店街の将来について考えることができた。その後、音楽の授業で行った商店街のテーマソングづくりでは、フィールドワークでの学びをもとに、教科横断的に取り組むことで、学習の対象を多面的・多角的に捉え、より学習を深めることができたと考える。また、活動後の「自分で何かをして、それが誰かのためや、地域のためになるのは、すごくやって良かったと思う。」という記述から、教科横断的な取組によって学びを深めたことで、地域への愛着といった生徒の「地域のため」に行動しようとする協力行動をしたいという情意にも変化をもたらすことができたと考える。

3年生は、昨年度行った地域への愛着尺度によるアンケートで「地域のために活動することは自分の楽しみである」「地域に住んでいる人たちのことがわかる」「地域や社会をより良くするために何をすべきか考えることがある」の項目が他の項目より低かったが、実施後にアンケートでは、同様の質問に対して肯定的な意見が9割以上であった。生徒はファシリテーションを通して、地域の魅力を再発見し、将来への期待が変わっていったと考える。また、割合としてはわずかであるが、「良さを残しつつ発展してほしい」という記述があり、持続願望にも変化が見られた。

b 職員の捉えから

1学期末に行った職員を対象とした令和4年度学校評価では、総合的な学習の時間に関する項目が、令和3年度に比べて、肯定的な意見が18%増えた。これは、計画を作成する際に、各学年でテーマを設定し、「どのような活動で、どのような力を身に付けさせたいのか」という、育成を目指す資質・能力を明確にしたためであると考えられる。

② 組織的に取り組めるための体制づくり

地域コーディネーターと“つばめいと”に、地域に関する学習全てに関わってもらったことで、次年度に総合担当が変わったとしても、前年度の活動の様子がわかる状態となった。また、いつ、誰が、どのように進めていくのか、役割分担が明確となり、年度初めに、地域コーディネーターと“つばめいと”で、年間計画をもとに、年度の方向性を確認すれば、新しい担当でも見通しをもって進めることができると考える。

4 おわりに

人口減、過疎化問題が進む社会において、子どもを育てる地域の教育力の低下が一層危惧されていく。

学校と地域・保護者が、「地域の子どものをどのように育てたいか」「そのために何をするか」を共通理解の上、組織的・継続的な取組が、今後一層重要となっていく。

だからこそ、学校では、地域のことを精通している人材との連携と将来を見据えた社会に開かれた教育課程の編成、そして組織的・計画的で継続的な取組が必要であると考えられる。